

『天使と悪魔』

竹内 勇人

ある日目を覚ますと目の前に天使と悪魔がいた。僕はこの状況を疑問に思った。なぜなら天使と悪魔がこの世に存在していて、さらに天使と悪魔が僕の部屋の中にいるからだ。僕は目を疑ったが天使と悪魔は触ることができるし動いてもいる。僕が呆氣にとられていると天使が

「あなたは今日競馬にお金を賭けるべきです。」

と言ひ、その後悪魔が

「あなたは今日悪天候に見舞われる。」

と言ったあと天使と悪魔は消え、部屋の中は僕一人になった。天使と悪魔に聞きたいことは沢山あったがすぐに消えてしまったので色々な疑問が残った。なぜ僕の前に現れたのか。彼らは僕の味方なのか敵なのか。分からないことだらけであるが今日競馬に行ってみることにした。ただ天使が適当なことを言っていたり、嘘をついているのかもしれない。なので僕は百円だけ賭けてみることにした。

今日は休みなので朝の支度を終えたあと直ぐに競馬場へ向かった。空は快晴で雲ひとつなかったので悪魔は嘘をついたのだと思った。しかし悪魔の目的がよく分からなかったなのでこのことは忘れることにした。

競馬場に着き券売機の前に立つと、人気の馬に賭けても面白くないので三連単でオッズの高い馬を選んだ。するとなんと予想は的中し百円が三百万円になった。僕は大喜びをしたが後悔もした。なぜなら百円しか賭けなかったからである。もっと天使の言うことを信頼して大金を賭けていれば今頃大金持ちになれた。今はもう天使は消えてしまったのでどうすることも出来ない。また天使が目の前に現れることを待つしかないのである。三百万円を何に使おうか迷いながら帰っていると突然大雨が降り出した。競馬場に向かう時悪魔が言ったことは嘘だと思ったのがどうやら本当らしい。悪魔は実は良い奴なのではないかと考えたが三百万円のことばかりを気にして悪魔のことはどうでも良くなった。近くに傘屋がたまたまあったので立ち寄ってみた。いつもならコンビニの五百円のビニール傘を買うのだが今日は天使に感謝をして二万円の高級傘を買うことにした。

その日の夜、明日また天使と会えることを願い眠りについた。

天使と悪魔に出会ってから二日目の朝目を覚ますとまた目の前に天使と悪魔がいた。天使は

「好意を持つ女性と積極的に会話をすべきです。」

と言ひ、悪魔は

「山下彩花は既婚者だ。」

と言った後天使と悪魔は消えた。昨日と同様聞きたいことは山ほどあったが僕が喋る間もなく天使と悪魔は消えてしまった。今日は後悔のないように全力で天使のアドバイス通りに行動すると決めた。悪魔の言っていた山下彩花というのは僕が中学の頃好きだった同級生である。今日は中学の同窓会が開催される日であり、僕は十年ぶりに彩花と会うので悪魔は僕に彩花のことを伝えたのだろう。しかし彩花が結婚しているのは結構残念だ。僕は中学時代彩花に告白することが出来なかった。もし僕が中学時代彩花に告白していたら彩花の結婚相手は僕だったかもしれない。

僕は昨日と今日の天使と悪魔の発言から天使は僕に対しアドバイスをしてくれて、悪魔は僕にとって嫌な事実を伝えてくるのだと推測した。

同窓会が開催される居酒屋に着くと中学時代親友だった達也^{たっや}がいた。達也と会うのは十年ぶりではあるが中学時代の話や恋愛の話で盛り上がった。

「お前が好きだった山下結婚してるらしいよ。」

これで悪魔が言うことが真実だと分かった。やっぱり僕が嫌な気持ちになることをわざわざ行ってくる悪魔は嫌な奴だと思った。僕が居酒屋についてから数分後彩花が居酒屋に入ってきた。彩花には夫がいることはわかっていてから数分後彩花が彩花に話しかけてみることにした。すると彩花は夫とは離婚協議中であることが分かった。嬉しかったのはそれだけでなく彩花との会話はとても盛りあがったのだ。今日も天使に感謝をし、天使への信頼度がさらに上がった。だけど僕のことを騙そうとしてきた悪魔には腹が立った。

その日の夜、明日の天使のアドバイスにワクワクしながら眠りについた。

天使と悪魔に出会ってから三日目の朝目を覚ますとまた目の前に天使と悪魔がいた。天使は

「カツ丼をご馳走するべきです。」

と言い、悪魔は

「時間に従わず後悔する。」

と言った後天使と悪魔は消えた。三日目ともなるともう少し慣れていた。毎日会うのに天使と会話することが出来ないのが残念に思った。天使からは一日一回きりではなく沢山アドバイスを貰いたいからである。

今日は仕事で疲れたが彩花がうちに来る約束をしていたので仕事の疲れなど忘れ帰宅した。仕事のあと料理を作るのは面倒だが天使のアドバイス通り僕が彩花に晩御飯を作ることにした。

卵を取ろうと思い冷蔵庫を開けると卵はなかった。おかしい、卵は買っていたはずなのに。天使はカツ丼をご馳走するべきと僕に言ったが、トンカツでも問題は無いだろう。今から卵を買いに行くのも面倒くさいので、仕方なくトンカツを作ることにした。

豚肉を揚げ終わりフライパンからカツを取り出そうとした時ふと時計を見ると時

刻は二十三時五十五分を回り、もうすぐ日付が変わろうとしていた。この時今日分のゲームのログイン報酬を受け取っていないことに気付いた。やばい、あと数分しかない。僕は火を止める間もなく自分の部屋にあるスマートフォンを取りに向かった。悪魔が言っていたのはこのことなのかと思った。ゲームのログイン報酬を受け取って一安心した後リビンクから彩花の悲鳴が聞こえた。僕が火から目を離していた隙に火事が発生したらしい。

その後僕は必死に消火活動をしたが、財布、通帳を含めて家にあつた物が全焼し、彩花は亡くなってしまった。彩花を僕の家と呼んだのも、僕が火事を起こしてしまったのも元を辿れば天使のアドバイスが原因である。僕はいちばん悪いのは僕であることを承知の上で少し天使に怒りを覚えた。

その日の夜、悪魔が言いたかつたのは僕がカツを揚げる時間が長すぎた、つまりカツを揚げる適切な時間に従わなかったから後悔するということでは無いのかと考え眠りについた。

天使と悪魔に出会ってから四日目の朝目を覚ますとまた目の前に天使と悪魔がいた。次の瞬間天使と悪魔の体にヒビが入り体が真つ二つに割れた。僕はその中身に驚愕した。なんと天使の正体は悪魔で悪魔の正体は天使だったのだ。